論　文　の　内　容　の　要　旨

論文題目　　先スペイン期アンデスにおける社会動態と構造

氏　　名　　渡　部　森　哉

本論文の目的は、スペイン人到来前のアンデス地帯において興亡を繰り返した諸社会を事例として、社会動態と構造の相互関係について文化人類学的観点から考察することにある。

社会動態を扱う第 1 部では、ある社会に変化が生じ異なったタイプの社会に移り変わる具体的様相を、インカ期を具体例として論じた。

従来インカ期、及びその直前の時代の状況については、史料の記述に基づき再構成されてきた。インカ期にはルパカ社会、チンチャ社会といった大規模な地方政体（行政単位）が各地にあったが、インカは各地方政体を征服し、既存の政治組織を温存したまま支配下に組み込み、間接統治を行ったと解釈されてきた。本論文ではこの解釈の妥当性を、ペルー北高地カハマルカ地方を事例として検討した。

カハマルカ地方に関する植民地期に残された史料を検討した結果、史料に記された情報が、しばしばインフォーマントの思惑によって歪められていることが明らかとなった。また当然、史料に残された情報は、それを書き記すスペイン人側の先入観や、翻訳プロセスによっても歪曲されている。

巡察記録によれば、カハマルカ地方には 7 つのワランガ（成人男性納税人口千人の単位）によって構成される地方政体（行政単位）があった。その起源と変容過程を、サンタ・デ

リア遺跡とタンタリカ遺跡の発掘データに基づき検討した。その結果、7 つのワランガの範囲内に、同じ土器、建築、埋葬形態の特徴が等質に広まっているという状況は認められず、少なくとも大きく 2 つのグループに分かれることが明らかになった。そのため 7 つのワランガというまとまりはインカ帝国の支配下に組み込まれることによって形成されたと考えられる。

カハマルカ地方の事例を他地域の事例と比較検討すると、ルパカ社会やチンチャ社会などインカ期の大規模社会の多くはインカの支配下で形成された、あるいは大規模化したと解釈できる。つまり、インカは征服した地方を独自の原理に従って再編成し 1 つの政治組織の下にまとめ上げたのであり、各地に存在する地方社会の姿はインカ期に大きな変革を受け形成された結果である。そのため先インカ期とインカ期との間には、連続性よりも断絶が目立つ。

地方社会の変化の実態を捉えた一方で、肝心のインカ帝国の成立過程そのものが不明瞭であった。つまりインカ社会そのものがそれより大きい政体の下で形成されたわけではないため、その始まりを解明する必要があった。さらになぜインカが拡大したのか、また、どのようにして短期間に各地を征服し 1 つの政治組織の下にまとめ上げたのかを説明する必要があった。本論文ではこうした問題の解決の手がかりを得るため、インカ王権の構造を分析した。

構造を扱う第 2 部では、インカ王権の構造を解明するため、先インカ期の構造を比較対象として設定した。形成期後期の祭祀センター、クントゥル・ワシの構造分析では、石彫と黄金製品に施された図像、墓の配置、建物の配置から、それらを貫く 1 つの構造、すなわち 2 つの二項対立（双分制）の組み合わせによって成立する三分制という構造を抽出した。支持するデータは少ないながら、形成期後期の大祭祀センター、チャビン・デ・ワンタル、後の時代のティワナクにおいても同じ構造が存在することが示唆される。そしてインカ王権の構造、インカ帝国の首都クスコの空間構造にも三分制が認められた。三分制は 1 対 2 に分かれ、1 に対応する範疇がチュリャと呼ばれる。しかしこの構造は正確には三分制ではなく、2 つの二項対立の組み合わせによって成立しているため、三者間の関係を示すために枠は常に 4 つ必要になる。この構造を説明するため、正四面体モデルを提唱した。

まず 4 つの頂点を有する透明な正四面体を想定し、隣り合わない 2 つの辺をそれぞれ赤と白で塗る。赤辺は例えば「男」対「女」と表されるシンボリックな二項対立（同質的双分制）、白辺は「現在」対「過去」と示される時間上の二項対立に対応すると考える。さらに白辺と赤辺の組み合わせは、「通事」対「共時」という第 3 の二項対立（異質的双分制）を示す。

そしてこの正四面体モデルで示される構造を平面で図式化する場合、正四面体をどの角度で写影するかによって見える形は異なる。白辺が 1 点で重なる角度から見ると、3 つの頂点からなる三角形が写るし、写影する面に対し赤辺、白辺をそれぞれ平行に配置すれば、

赤辺と白辺は直交し、4 頂点が示された正方形が写る。このモデルに従うと、双分制、三分制、四分制は、正四面体の一部分を見るか、全体を見るか、そしてどの角度から見るか、によって決定される相対的な関係、即ち、同一構造の異なった表象と説明できる。正四面体モデルを用いて先スペイン期アンデスにおける構造の事例を説明すれば次のようになる。

形成期後期のクントゥル・ワシとチャビン・デ・ワンタルでは、白辺と赤辺の対立は祭司集団／非祭司集団の区分に対応する。非祭司集団は 2 つの半族組織に分かれ、赤辺上の 2 つの頂点に対応する。白辺に対応するのは過去の祭司集団と現在の祭司集団であり、両者は時間上の二項対立を示し、両者の間には連続性が存在する。

同じ構造は後のティワナクにも継承されたが、そこではピューマ、コンドル、魚の 3 種類の動物を用いて三分制として示す方法が主流であった。それは正四面体を三角形として写していると説明できる。3 種類の動物が 1 対 2 に分かれるとすれば、1 に対応するのはピューマか魚である。

インカ帝国全体および首都クスコは、それぞれ 4 つのスーユ（部分）に分割され、四分制が機能していた。また同時にコリャナ、パヤン、カヤウの 3 つの範疇によって示される三分制も存在した。この三分制は 1 対 2 に分かれるが、1 に対応するのはチュリャと呼ばれ、コリャナ、もしくはカヤウがチュリャとなる。しかしインカにおける四分制と三分制も同一構造の異なった表象である。

インカ王権の構造に関していえば、インカ王は同時期に 3 人存在し、それぞれコリャナ、パヤン、カヤウに対応した。そしてそれは 1 対 2 に分かれるが、1 に対応する王がサパ・インカと呼ばれた。ビラコチャ王以前はカヤウの王が、パチャクティ王以降はコリャナの王がサパ・インカとなった。そしてビラコチャ以前は、聖俗の権力構造が一致しており、政治指導者、儀礼指導者はともにカヤウから輩出されたが、パチャクティ以降、俗（政治）の権力はコリャナが、聖（儀礼）の権力はカヤウが握り、聖俗の権力構造が分離した。

4 つのスーユと 3 つの範疇との対応関係は、チンチャイスーユ＝コリャナ、コリャスーユ＝パヤン、アンティスーユ＝カヤウ（現在）、クンティスーユ＝カヤウ（過去）であった。アンティスーユ（カヤウ）がチュリャとなる場合、アンティスーユのサパ・インカはクンティスーユ（カヤウ）に対応するインカ帝国の初代王マンコ・カパックと時間上の二項対立、連続性を示す。しかしパチャクティ以降、コリャナのインカ王がサパ・インカとなった場合、政治構造はスーユから独立して決定され、マンコ・カパックは政治構造から除かれ、儀礼構造においてのみ存在した。

インカ帝国の首都クスコにはハナン／ウリンで示される双分制も存在した。しかし、正四面体構造を成立させるためには少なくとも 2 種類の双分制が存在するはずである。ハナン／ウリンが、もともとあった異質的双分制、同質的双分制の 2 つの双分制が混同されることによって成立した可能性がある。

第 3 部では構造に注目し、次のような中央アンデス南部における社会動態モデルを実験

的に構築した。

形成期社会とは祭祀センターを中心に統合された、祭祀共同体であった。祭祀を中心とした社会統合のあり方は疲弊し、形成期末期（上層）以降、俗の権力が確立し、聖俗の分離が生じた。

南部における諸社会の通時的変化は、次のように捉えることができる。形成期上層の半ば（200 B.C.-A.D. 200）にはプカラを中心としたまとまりがティティカ湖北岸地域に形成され、その後の時期（A.D. 200-600）には中央集権の度合いが低い社会が複数認められ、その後のティワナク期（A.D. 600-1100）には中央集権的社会が興り、アルティプラノ期（A.D. 1100-1450）には小規模社会が分散しており、インカ期（A.D. 1450-1532）には中央集権的社会が台頭した。つまり時間軸に沿って振り子のように中央集権の極に近づいたり遠ざかったりしており、次第に中央集権度は高まっていったと捉えることができる。そして中央集権の極に近づいた時には同一構造が顕在化した。

インカは突如拡大を開始し、各地を征服し大規模な政治組織を作り上げた。征服を行ったのはパチャクティによるクーデター以降の、コリャナのサパ・インカである。コリャナのサパ・インカは古くからの構造に従って選出されたのではなく、構造上の範疇の配置を組み換えることによって王位を奪取した。王位の正統性を過去に求めることはできないため、彼らは戦士として先頭に立って各地の征服を行い、世俗面での優位を確保する必要があった。そしてインカは、征服後、各地の民族集団を分断、統合して同規模の行政単位を創出し、短期間に整然とした統治体制を築いた。

一方、形成期末期以降の中央アンデス北部では、同一構造が継承され保持されたという証拠は確認できず、大規模な分裂、統合の動きも生じなかった。

そして南部と北部を攪拌する動きは、常に南部の社会から起こった。そしてインカ社会は、同一構造が重層的に重なった、高度に構造化された社会であるといえる。